

平成 24 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

中学生からみた家族の家族機能と家族満足度に関する研究

スポーツ健康科学専攻

神谷 葉南

研究指導教員 島内 憲夫

論文指導教員 島内 憲夫

合格年月日 平成 25 年 2 月 25 日

論文審査員 主査 弘 沢 正 孝

副査 渡 邊 貴 裕

副査 島 内 憲 夫

## 目次

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 第1章 緒言 .....                | 2  |
| 第2章 関連文献の考証 .....           | 4  |
| 第1節 家族機能 .....              | 4  |
| (1) 家族の変化 .....             | 4  |
| (2) 家族機能の定義 .....           | 5  |
| (3) 家族機能と中学生 .....          | 5  |
| 第2節 家族満足度 .....             | 6  |
| 第3節 家族像の意義 .....            | 7  |
| 第3章 研究目的 .....              | 8  |
| 第4章 研究方法 .....              | 9  |
| 第1節 研究方法 .....              | 9  |
| (1) 調査対象 .....              | 9  |
| (2) 調査方法 .....              | 9  |
| (3) 調査期間 .....              | 9  |
| (4) 分析方法 .....              | 9  |
| (5) 質問紙の構成 .....            | 9  |
| 第2節 用いた尺度について .....         | 10 |
| 第3節 倫理的配慮 .....             | 13 |
| 第5章 結果 .....                | 14 |
| 第1節 対象の属性 .....             | 14 |
| 第2節 家族機能 .....              | 14 |
| (1) 学年・性別の凝集性尺度の各質問項目 ..... | 14 |
| (2) 兄弟数の関連 .....            | 15 |
| (3) 学年・性別の凝集性 .....         | 15 |
| (4) 家族タイプの分布 .....          | 16 |
| 第3節 家族満足度 .....             | 16 |
| 第4節 理想の家族 .....             | 17 |

|                          |    |
|--------------------------|----|
| (1) 学年・性別 .....          | 17 |
| (2) 理想の家族についての自由記述 ..... | 18 |
| 第 4 節 家族機能との関連 .....     | 20 |
| 第 6 章 考察 .....           | 21 |
| 第 1 節 対象者の特性 .....       | 21 |
| 第 2 節 凝集性 .....          | 21 |
| (1) 凝集性尺度 .....          | 21 |
| (2) 凝集性尺度と兄弟数の関連 .....   | 22 |
| (3) 家族タイプ .....          | 22 |
| 第 2 節 家族満足度 .....        | 23 |
| 第 3 節 家族機能との関連 .....     | 24 |
| 第 4 節 理想の家族 .....        | 25 |
| 第 5 節 今後の課題 .....        | 25 |
| 結論 .....                 | 27 |
| 要約 .....                 | 28 |
| Summary .....            | 30 |
| 謝辞 .....                 | 32 |
| 参考文献 .....               | 33 |

## 第1章 緒言

家族とは、これまで森岡<sup>19)</sup>によって「夫婦・親子・きょうだいなど、少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い関わり合いで結ばれた、幸福〔well-being〕追求の集団である」と言われ、このような考え方はごく普通に受け入れられてきた。しかし、日本の家族形態は核家族や単身世帯が増え、少子・高齢化が進行している。20世紀後半、家族の個人化が急速に進み、家族の多様化をもたらしたと言われ、現代家族は、近代家族のような主流となるモデルは存在しないと言われている。近代家族においては、個人化や多様化によって家族のコミュニケーション不足などが問題となっており、家族機能の希薄化が言われている。この様な近代家族の状況においても、家族の凝集性がしっかり確保されて初めて、集団に埋没しない個人を重視した質の高い家族の関係性が築けるのではないかと述べている。<sup>41)</sup>

中学生の年代は、第二次性徴を迎え、精神的においても様々な発達課題や危機に直面しやすいため、悩みを抱えやすい時期である。文部科学省<sup>21)</sup>の調査によると、平成22年度における中学生の不登校児童生徒の状況は、18年度の11万人から21年度10万人へと緩やかに減少している傾向にある。しかし、小・中・高の中でも中学生の不登校の割合が多いことがわかった。また、不登校の要因として、「親子関係をめぐる問題」、「家庭内不和」などがあげられている。中学生をもつ家族の家族関係の先行研究で村木ら<sup>24)</sup>は、家族関係満足感が高いと精神的健康度が高まる傾向にあることを明らかにしている。そして、家族関係のタイプごとの家族関係満足感について、極端群は、バランス群、中間群と比較して有意に家族関係満足感得点が低いことが示されている。したがって、「きずな」(凝集性)と「かじとり」(適応性)が極端に偏っていると認知する中学生は家族関係の満足感が低いものの、どちらか一方の次元でバランスが取れていれば家族関係に満足しているということが明らかにされている。

ところで、茂木<sup>23)</sup>は、凝集性は家族には現状を維持するための重要な機能として認められやすく、家族のもつ家族像にも反映していると述べている。また、青年の理想の家族像では、構造的バランスのとれたものが多いことが報告されている。凝集性を測ることで家族像を導き出すことができる。しかし、先行研究では中学生における理想の家族像についての研究は極めて少ない。そこで、近代家族のような主流となるモデルが存在しない現代は、どの様な家族なのかを家族機能と家族満足度から分析し、

現代の中学生の理想の家族像を明らかにすることで現代家族の問題点の解決の一助としたい。

## 第2章 関連文献の考証

### 第1節 家族機能

#### (1) 家族の変化

家族とは、これまで森岡<sup>19)</sup>によって、「夫婦・親子・きょうだいなど、少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的関わり合いで結ばれた、幸福〔well-being〕追求の集団である」といわれ、このような考え方はごく自然に受け入れられてきたが、先進社会ではいま、結婚しない同棲カップルや結婚によらない出産などで、そのような家族観が変化してきている。

現在私達が認識している近代家族は、社会の近代化とともに変化し生まれたものであり、社会全体の機能的文化に伴い、家族も機能的に特化した集団となった。この家族の第一の機能である子どもの社会化は、〈性—生殖—扶養〉という連鎖から生まれる家族集団の独自性を表す機能であり、第二の機能である成員の情緒的安定機能は、近代的理念（自由、平等、友愛）の家族領域への規範化・浸透の結果生じたものと考えられる。家族は、核家族という形態と性別役割分業という方式を取ることでこの二つの機能を遂行し、近代産業社会に対して機能的貢献を果たすとともに家族員の欲求にも応えてきた。しかし、近代家族がもつ自由や平等という理念は、家族形態の自由な選択や、平等理念の追求として性別役割分業の否定といった家族の多様化や個人化という変動要因をも内包するものである。この個人化の特徴を表しているデータとして、国民生活に関する調査の「日常生活で充実を感じる時」の答えに「友人や知人と会合、雑談しているとき」「趣味やスポーツに熱中しているとき」がある。この二つの項目は、個人の欲求充足の場が家族の外にひろがっていることを示している。個人化の進展とともに家族が絶対ではなくなっていくことが考えられる。<sup>3)</sup>

近代家族の中でも今日、社会現象としての核家族化が社会問題となっている。Good<sup>5)</sup>もこの様に述べている。近代史の基本的な事実、拡大した親族集団の衰退と、もっとも一般的な家族形態としての孤立した核家族(detached unclear family)の興隆である。晩婚化や非婚化による未婚単身生活者の増大や高齢者のひとり暮らし、あるいは高齢の夫婦のみの世帯の増大、さらに離婚の増大などによる父子家庭や母子家庭の増大、加えて共働き夫婦や無子夫婦の増大など、今日では核家族形態の家族が標準的家族といえないほど多様化してきている。それだけに子育てや高齢者介護など、かつては家族の責任で果たされてき

た事柄が、今日では社会や地域の重要な福祉問題になっている。21世紀、家族は個人の尊厳を第一に、ゆるやかに連帯し、社会に統合されることになるであろう。「これこそが家族」というモデルが曖昧になる反面、自らがどのような「選択」をするかがとわれるようになるはずである。児童虐待やドメスティック・バイオレンス、家族による高齢者虐待など、家族が個人にとって必ずしも無条件で「安心・安全の居場所」でなくなった今日だからこそ、個人一人ひとりの尊厳を守るという社会の基本的合意と家族の絆をしっかりと見据える心構えが必要になってきている。

## (2) 家族機能

本研究での家族機能の定義は、「家族成員との関係で個人がどのように考え対応する機能かに加え、家族の関係性をどのように維持しようとしているのかという家族の機能のことである」<sup>10)20)38)</sup>とする。

近年、日本の家族形態は多様に変化している。そのため、現代の家族は一昔前の家族とは異なる様相を呈してきているといえる。そのような変化の中で、現代の家族の持つ特性を正確に把握することは、重要と考えられる。それらを把握するために、家族機能測定尺度がある。家族機能の測定に関する研究は数多くされている。しかしながら多くは海外におけるものである。佐伯ら<sup>37)</sup>によると、特にアメリカでは、家族機能評価の前提となる家族モデル理論とそれに基づく家族機能を測定する尺度が数多く開発されている。一方、欧米に比べれば日本における実証的家族研究の展開は未だ不十分な側面が多く、家族の特性をより客観的、定量的に測定する方法論が日本にはきわめて乏しいことがあげられる。

家族機能を測定する尺度で日本語版に訳されているものは、いくつか存在する

## (3) 家族機能と中学生

中学生の年代は、第二次性徴を迎え、精神面においても様々な発達課題や危機に直面しやすいため、悩みを抱えやすい時期である。さらに、小学校の時に比べ様々な生活場面における変化を体験しやすいことから心理的に不安定になりやすく、なやみを抱えやすいことが指摘されている。<sup>24)</sup>中学生の発達段階の特徴として、思春期に入り、親や友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気づきはじめるとともに、自意識と客観的事実との違いに悩み、様々な葛藤の中で、自らの生き方を模索しはじめる時期である。また、大人との関係よりも、友人関係に自らへの強い意味を見いだす。

さらに、親に対する反抗期をむかえるなど、親子のコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり、思春期特有の課題が現れる。<sup>40)</sup>

村木ら<sup>24)</sup>は、中学生は子どもと大人の境界にあると言えるが、家族、特に親からの自立を図ろうとする彼らの気持ちを尊重し、自立を促していくと同時に、まだ完全な自立は難しい彼らを必要に応じて支えていくという距離間を持った関わりが重要になると示唆している。<sup>27)</sup>

家族のライフサイクルからみた基本的発達課題において思春期は「教育期」にある。ライフサイクルにおける段階の移行は「平均的家族のほとんど必然的に経験するツウ受の出来事であるとともに、それ自体危機的移行(critical transition)である」と認識され、家族は、ライフサイクルの中で家族の発達課題といういくつかの危機を乗り越えることにより健康な家族としての姿を継続していく。(中村ら、2006)

このように先行研究でも言われているように中学生の時代は、家族との関係性が非常に重要であることが考えられる。不安定な中学生の時代を乗り越えるために家族の支えが鍵となってくるのではないかと考える。また、青年期がいる家族にとっても親子関係が良好であることは家族全体にとってもいくつかの危機を乗り越え、健康な家族を作るうえで非常に重要になってくると考えられる。

## 第2節 家族満足度

家族満足度に関しての先行研究は少なく、研究がされていたとしても家族満足度ではなく生活満足度について調査をしている研究が多くみられる。

先行研究で村木ら<sup>24)</sup>は、中学生の友人関係、家族関係と精神的健康度の関連での中で家族関係のタイプと家族関係満足度尺度を使い、Olson の円環モデルでの極端群は、バランス群、中間群よりも有意に家族関係満足感得点が低く、「きずな」(凝集性)と「かじとり」(適応性)がどちらか一方の次元でバランスが取れていれば、家族関係に満足できているということを明らかにしている。つまり中間のレベルに位置する家族は、家族関係に満足していることがわかる。

黒川<sup>17)</sup>は、家族関係の良否を表す指標として「家族満足度」に着目している。食生活と家族に対する満足度に着目し、食事シーンと主観的に認知される家族満足度との関係があると示唆している。

先行研究より家族関係と家族満足度は、関係性がみられることがわかる。



千葉<sup>3)</sup>は、青少年の家庭生活満足度の高まりを世界青少年意識調査の結果から日本の青少年は、生活の主要場面での満足度を高める傾向にあり、「家族」への満足度も増加傾向にあることを示唆している。この様な、青少年の家族への満足の高まりから青少年にとって家族は情緒的安定をもたらす条件を充分備える場となってきたと言われている。

### 第3節 家族像の意義

家族像に関する先行研究では、中学生を対象に家族像についての文献は極めて少なく家族全体を対象にして書いてある文献が多い。家族像または家族イメージについて調査を行うときに、多くの文献はOlsonの家族円環モデルを使い「凝集性」「適応性」「コミュニケーション」の3つに関する側面から家族の機能に対して、どのような認識をしているのか、実際の自分の家族の現実の評価との関係からみている。そして、茂木<sup>22)</sup>は家族が健康な家族機能として重要視する機能が、家族の現状を維持するために重要なのか、あるいは家族の現状に不足しているから重要なのか、家族のもつ健康な家族像と現在の家族の家族機能の状況という観点から、家族のもつ家族像の意味を検討している。Olsonの家族円環モデル以外では、大学生を対象に行った家族イメージ投影図を使った方法や、インタビュー調査、フェイスシートなどを交えた独自に作ったアンケートで行っている調査がある。

本研究での家族像とは、家族機能測定尺度の凝集性から家族の特徴を検討し、それと家族満足度と理想の家族から得られたデータより、現代の中学生が実際に感じている現実の家族のイメージや理想の家族のイメージなど含めた意味での家族像とする。

### 第3章 研究目的

本研究は、中学生からみた家族の家族機能と家族満足度の関連について、家族満足度と家族機能測定尺度を用いて分析し、現代の理想の家族像を明らかにすることを目的とする。

## 第4章 研究方法

### 第1節 研究方法

#### (1) 調査対象

千葉県のA中学校（成田市近郊）に通う中学生 183名。回収数 183名(100%)。有効回答数 169名。1年生 49名(男性 22名、女性 27名)、2年生 50名(男性 20名、女性 30名)、3年生 70名(男性 33名、女性 37名)。

#### (2) 調査方法

無記名自記式質問紙法を用いて調査を行った。

#### (3) 調査期間

平成24年9月～11月

#### (4) 分析方法

家族機能測定尺度と家族満足度と理想の家族の関係性については、相関係数を使用した。統計処理には、Microsoft Excel2010とSPSS ver.15を用いた。

#### (5) 質問紙の構成

a) フェイスシート (FS)：学年、性別、家族構成を問う3項目。家族構成を問う質問では、「おじいさん、おばあさんは一緒に住んでいますか」を「はい」「いいえ」を選択させた。

b) 家族機能調査：Olsonの家族機能測定尺度 FACESⅢ(草田ら訳)を用いて家族機能の凝集を問う10項目を(1点：まったくない, 2点：たまにある, 3点：ときどきある, 4点：よくある, 5点：いつもある)の5段階で選択させた。集計時に得点化した。

c) 家族満足度：「あなたは、家族生活に満足していますか？」の問いに(1点：不満, 2点：やや不満, 3点：どちらともいえない, 4点：まあまあ満足している, 5点：満足している)の5段階で選択させた。集計時に得点化した。

d) 理想の家族：「あなたがこれこそ最高、理想だという家族を思い浮かべてみ

て下さい。あなたの家族はその理想の家族と比べて、似ているか、似ていないか考えて、当てはまる番号に○をつけてください。」の問いに(1点：全く似ていない, 2点：あまり似ていない, 3点：どちらかといえば似ている, 4点：まあまあ似ている, 5点：大変似ている)の5段階で選択させた。集計時に得点化した。

e) 「想像したあなたの理想の家族とはどのような家族ですか。」の問いを自由記述で答えさせた。

## 第2節 用いた尺度について

家族測定尺度は、海外で開発され、数種類の日本語版が翻訳されている。Moos は、FES(Family Environment Scale)尺度を開発し、野口ら<sup>32)</sup>によって日本語版が作成されている。Feetham は、FFFS(Feetham Family Functioning Survey)尺度を開発し、戈木ら<sup>27)</sup>によって日本語版が作成されている。さらに、日本の実状に照らし合わせて、法橋ら<sup>28)</sup>によって再検討され、FFFS 日本語版 I が開発されている。Epstein は、によって作成された、FAD(Family Assessment Device)尺度を開発し、佐伯ら<sup>37)</sup>によって日本語版が作成されている。そして、看護職者らにグループによって FDM(Family Dynamics Measure)が開発され、関戸<sup>12)</sup>が日本語版 FDM II (the Family Dynamics Measure II)を作成している。そして、Olson は FACES III 尺度を開発し、草田ら<sup>16)</sup>によって日本語版が作成されている。

本研究では、日本でも多く使われている Olson の円環モデルの日本語版を使用することにした。家族機能測定尺度の FACES III (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III) は、Olson<sup>34)</sup> が家族機能を評価するために開発した測定道具である。円環モデルでは、家族の機能度を「凝集性」「適応性」「コミュニケーション」の3次元で捉える。

凝集性 (Cohesion) は「家族成員がお互いにもつ情緒的なつながり」と定義されている。凝集性は主に、情緒的な結びつき、家族成員間におけるお互いの関与の程度、時間、空間、意思決定、友人、趣味、余暇活動といった下位項目によって構成されている。凝集性は低い方から、「遊離 (disengaged)」－「分離 (separated)」－「結合 (connected)」－「膠着 (enmeshed)」の4段階に分けられ、中間のレベルである「分離」と「結合」では家族が最も機能的に働くが、両極のレベル「遊離」と「膠着」では家族の機能度が極端に働く為、家族機能が適切に働かないとされている。適応性 (adaptability) は、「状況的・発達の危機に対して、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力」と定義されている。適応性は主に、リーダーシップ、規律、話し合いのスタイル、役割関係、規

則といった下位項目より構成される。適応性は低い方から、「硬直 (rigid) 」－「構造化 (structured) 」－「柔軟 (flexible) 」－「無秩序 (chaotic) 」の4段階に分かれ、これも凝集性と同様、中間のレベルである「構造化」と「柔軟」では家族が最も機能的に働くが、両極のレベル「硬直」と「無秩序」では家族の機能度が極端に働くため、家族機能が適切に働かないとされている。

円環モデルの重要な仮説の一つは、両次元とも中間のレベルで働く事がもっとも機能的であり、問題のない健康な家族が位置し、高すぎても低過ぎても家族は機能的でなくなるという仮説である。この関係をOlsonは二次曲線的な関係 (curvilinear) と呼んでいる。3つ目の次元である「コミュニケーション (communication) 」は凝集性と適応性の両次元を促進させる働きを持つ。コミュニケーションはそれぞれポジティブなコミュニケーション技法とネガティブなコミュニケーション技法に分けられる。ポジティブなコミュニケーション技法は同情的、共感的、支持的なメッセージで構成される。ポジティブなコミュニケーション技法は、夫婦・家族の成員が凝集性と適応性に関連する変化の要求とその選択を家族成員間の中で共有することを可能にする為、両次元の変化を状況に応じて変化させる事を促進する。ネガティブなコミュニケーション技法は、逆説的メッセージ、ダブルバインド、批判的な発言で構成されている。ネガティブなコミュニケーション技法は、夫婦・家族の成員が彼らの感情を共有する能力を最小限に抑えてしまうため、状況に応じた円環モデルは、凝集性、適応性、コミュニケーションの3つの次元から構成されている。

円環モデルでは図1に示したように、凝集性・適応性における両次元の4つのレベルを組み合わせて、家族を16のタイプに分類している。さらに、これら16タイプの家族は、両次元とも中間レベルにあるバランス (Balanced) 群、どちらか一方の次元が中程度で他方が極端な中間 (Mid-Range) 群、両次元ともが極端な極端 (Extreme) 群の3つのグループに分けられる。円環モデルの重要な仮説の一つは、バランス群に位置する家族は、最も家族が機能的に働くため問題を呈しにくく、極端群に位置する家族は機能不全に陥るため問題を呈しやすくなる、という仮説である。ここでもまた、両次元とも中程度が最も機能的であるという、二次曲線的な関係が主張されている。

このような円環モデルの仮説を基に、家族の機能度を、凝集性と適応性の両面から測定する道具として開発された尺度がFACES IIIである。



### 第3節 倫理的配慮

研究の趣旨を予め本学のスポーツ健康科学研究科研究等倫理委員会に提出し、その倫理審査を通過して許可を得た。調査前に被調査全員にそのクラスの担任の先生から口頭と書面で調査の趣旨と、個人が特定されることやプライバシーの侵害がないことを説明して被調査者の同意を得た。

## 第5章 結果

### 第1節 対象の属性

有効回答を得た調査対象 169 名の属性は以下の通りである。

表 1 に対象者の学年別の男女比を示した。有効回答を得た 169 名中、性別では男性 75 名 (44.4%)、女性 94 名 (55.6%)、1 年生 49 名 (男性 22 名、女性 27 名)、2 年生 50 名 (男性 20 名、女 30 名)、3 年生 70 名 (男性 33 名、女性 37 名)であった。

表 2 に対象者の兄弟数を示した。祖父母との同居の有無では、祖父母と同居していない 145 人 (85.8%)、祖父母と同居している 24 人 (14.2%)であった。きょうだい数では、4 人が 1 名 (15.4%)、3 人が 17 名 (10.1%)、2 人が 79 名 (46.7%)、1 人が 46 名 (27.2%)、0 人が 26 名 (15.4%)であった。家族形態を知るために、母子家庭や父子家庭などを聞く質問はプライバシーの問題上質問できなかった。そのため、本研究では祖父母の有無で「核家族」と「三世帯家族」に分けた。その結果、核家族組 145 組 (85.8%)、三世帯家族組 24 組 (14.2%)であった。

|     | 男性 |      | 女性 |      | 全体  |     |
|-----|----|------|----|------|-----|-----|
|     | n  | %    | n  | %    | n   | %   |
| 1年生 | 22 | 44.9 | 27 | 55.1 | 49  | 100 |
| 2年生 | 20 | 40   | 30 | 60   | 50  | 100 |
| 3年生 | 33 | 47.1 | 37 | 52.9 | 70  | 100 |
| 計   | 75 | 44.4 | 94 | 55.6 | 169 | 100 |

| 兄弟数 | n   | %    |
|-----|-----|------|
| 0人  | 26  | 15.4 |
| 1人  | 46  | 27.2 |
| 2人  | 79  | 46.7 |
| 3人  | 17  | 10.1 |
| 4人  | 1   | 0.6  |
| 合計  | 169 | 100  |

### 第2節 家族機能

#### (1) 学年・性別の凝集性尺度の各質問項目

表 3 に男女別の凝集性尺度の平均値と SD を示した。凝集性尺度の各質問項目の得点を



男女別で平均値の比較をしたところ、学年差、男女差に有意な差はみられなかった。

表3.男女別の凝集性尺度の平均値とSD

|     |                               | 男性        |    | 女性        |    |
|-----|-------------------------------|-----------|----|-----------|----|
|     |                               | 平均        | SD | 平均        | SD |
| 凝集性 | 1 私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。    | 3.52±1.13 |    | 3.71±1.10 |    |
|     | 2 家族は、それぞれの友人を気に入っている。        | 3.75±1.07 |    | 3.94±0.10 |    |
|     | 3 私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。     | 3.31±1.03 |    | 3.38±1.17 |    |
|     | 4 家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。   | 3.56±0.92 |    | 3.76±1.10 |    |
|     | 5 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。 | 3.04±1.12 |    | 3.36±1.18 |    |
|     | 6 私の家族は、お互いに密着している。           | 2.84±0.96 |    | 2.87±1.10 |    |
|     | 7 家族で何かをする時は、みんなでやる。          | 3.21±1.11 |    | 3.02±1.11 |    |
|     | 8 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。 | 2.83±0.99 |    | 2.65±1.08 |    |
|     | 9 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。  | 3.03±1.15 |    | 3.38±1.33 |    |
|     | 10 家族がまとまっていることは、とても大切である。    | 4.09±1.03 |    | 4.24±0.99 |    |

## (2) 兄弟数の関連

表4に凝集性尺度と兄弟数の関連を示した。凝集性尺度の各質問項目と兄弟数との関連では、4項目「家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている」と兄弟数に5%水準で有意な差がみられた。

表4.凝集性尺度と兄弟数の関連

|     |                               |        |
|-----|-------------------------------|--------|
| 凝集性 | 1 私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。    | 0.004  |
|     | 2 家族は、それぞれの友人を気に入っている。        | 0.041  |
|     | 3 私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。     | 0.034  |
|     | 4 家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。   | -.151* |
|     | 5 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。 | -.096  |
|     | 6 私の家族は、お互いに密着している。           | -.071  |
|     | 7 家族で何かをする時は、みんなでやる。          | -.009  |
|     | 8 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。 | 0.042  |
|     | 9 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。  | -.027  |
|     | 10 家族がまとまっていることは、とても大切である。    | -.093  |
|     | 合計                            | -.041  |

\*.p<.05

## (3) 学年・性別の凝集性

表5に男女別の凝集性の平均値とSDを示した。凝集性は、学年差、男性 33.17±7.99、女性 34.32±8.67、共に有意な差はみられなかった。

**表5.男女別の凝集性の平均値とSD**

|    | 平均値        | SD |
|----|------------|----|
| 男性 | 33.17±7.99 |    |
| 女性 | 34.32±8.67 |    |
| 全体 | 33.8±8.37  |    |

(4) 家族タイプの分布

表6に家族タイプ別の平均値とSDを示した。先述の通り、凝集性は低い方から、「遊離 (disengaged)」－「分離 (separated)」－「結合 (connected)」－「膠着 (enmeshed)」の4段階に分けられる。Olsonらに倣い点数の配分は、遊離 10-24 点、分離 25-31 点、結合 32-38 点、膠着 39-50 点とした。)

その結果、遊離 18 人 (10.7%)、分離 45 人 (26.6%)、結合 56 人 (33.1%)、膠着 50 人 (29.6%) であった。「結合」がもっとも高く続いて「分離」が高く、「遊離」がもっとも低い結果になった。「結合」と「分離」は、凝集性が中間レベルにあり、家族機能が最もよく働くとされている。この結果から本研究の対象者の家族は、比較的家族機能が働いていると考えられる。

**表6.家族タイプ別の平均値とSD**

|    | n   | %    | 平均         | SD |
|----|-----|------|------------|----|
| 膠着 | 50  | 29.6 | 43.28±3.69 |    |
| 結合 | 56  | 33.1 | 35.00±1.92 |    |
| 分離 | 45  | 26.6 | 28.07±2.05 |    |
| 遊離 | 18  | 10.7 | 18.17±4.00 |    |
| 合計 | 169 | 100  | 33.81±8.37 |    |

**第3節 家族満足度**

表7に男女別の家族満足度の平均値とSDを示した。家族満足度では、学年差、男性 4.16±1.04、女性 4.03±1.13、共に有意な差はみられなかった。

表8に対象者全体の満足度比を示した。対象者全体の家族満足度比では、「満足している」78人(46.2%)、「まあまあ満足している」(29.6%)、「どちらともいえない」27人(16%)、「やや不満」6人(3.6%)、「不満」(4.7%)であった。全体の7割が満足している傾向であった。

|    | 平均値       | SD |
|----|-----------|----|
| 男性 | 4.16±1.04 |    |
| 女性 | 4.03±1.13 |    |
| 全体 | 4.09±1.09 |    |

|            | n=169 | %    |
|------------|-------|------|
| 満足している     | 78    | 46.2 |
| まあまあ満足している | 50    | 29.6 |
| どちらともいえない  | 27    | 16   |
| やや不満       | 6     | 3.6  |
| 不満         | 8     | 4.7  |

#### 第4節 理想の家族

##### (1) 学年・性別

表9に男女別の理想の家族の平均値とSDを示した。理想の家族では、学年差、男性(3.55±1.11)、女性(3.36±1.16)、共に有意な差はみられなかった。

表10に対象者全体の理想の家族比を示した。対象者全体の理想の家族では、「大変似ている」32人(18.9%)、「まあまあ似ている」57人(33.7%)、「どちらかといえば似ている」43人(25.4%)、「あまり似ていない」28人(16.6%)、「全く似ていない」9人(5.3%)であった。全体の6割程度は、似ていると答える傾向であった。

|    | 平均値       | SD |
|----|-----------|----|
| 男性 | 3.55±1.11 |    |
| 女性 | 3.36±1.16 |    |
| 全体 | 3.44±1.13 |    |

|              | n=169 | %    |
|--------------|-------|------|
| 大変似ている       | 32    | 18.9 |
| まあまあ似ている     | 57    | 33.7 |
| どちらかといえば似ている | 43    | 25.4 |
| あまり似ていない     | 28    | 16.6 |
| 全く似ていない      | 9     | 5.3  |

## (2) 理想の家族についての自由記述

図2に理想の家族についての自由記述の一部と表11に理想の家族の分類分けを示した。アンケート用紙の質問項目の中に、「想像したあなたの理想の家族とはどのような家族ですか。」の問いを自由記述で答えさせた問いがある。その結果を6つのグループ、①「仲の良い家族」104人(61.5%) キーワード(仲の良い、暖かい、笑顔、平和、協力、会話) ②「マイナス面のない家族」43人(25.4%) キーワード(喧嘩、お金、差別、門限、うるさい) ③「特になし」7人 4.1%④「普通の家族」6人(3.6%)⑤「自由な家族」5人(3%) ⑥「自分の家族」4人(2.4%)に分類した。その結果、仲の良い家族が理想だと答えた人が全体の6割であった。

- ①「仲の良い家族」
- ・仲のいい家族。
  - ・温かい家族。
  - ・サザエさんの様な家族。
  - ・困った時は、誰にでも相談できる明るい家族。
  - ・互いに協力し合う。
  - ・会話が深い家族。
  - ・平和。
  - ・いつでも笑顔で笑いが絶えない家族。
- ②「マイナス面のない家族」
- ・若干お金を持っている家族。
  - ・喧嘩の少ない家族。
  - ・相談を聞いてくれて、勝手に決めつけなくて差別しない家族。
  - ・門限の決まりがない家族。
  - ・自分勝手な人がいない。
  - ・家に帰るといつも誰かがいる家。
  - ・面倒なことはいわない。
  - ・休日には家族と出かける。
- ③「特になし」
- ・考えつかない。
- ④「普通の家族」
- ・普通に暮らせる家族。
  - ・普通のことを普通にし、普通に生活する。
- ⑤「自由な家族」
- ・ありのままの自分を出している。
  - ・自由な家族。
- ⑥「自分の家族」
- ・自分の家

図2.自由記述の一部

表11.理想の家族の分類分け

|            | n=169 | %    |
|------------|-------|------|
| 仲の良い家族     | 104   | 61.5 |
| マイナス面のない家族 | 43    | 25.4 |
| 特になし       | 7     | 4.1  |
| 普通の家族      | 6     | 3.6  |
| 自由な家族      | 5     | 3    |
| 自分の家族      | 4     | 2.4  |

#### 第4節 家族機能との関連

表12に凝集性と家族満足度と理想の家族との関連を示した。家族機能尺度と家族満足度と理想の家族との関連では、家族機能尺度と家族満足度間、家族満足度と理想の家族間、家族機能と理想の家族間のそれぞれに( $P < .01$ )に有意な正の相関がみられた。特に家族機能と家族満足度、家族満足度と理想の家族において比較的高い相関がみられた。

**表12.凝集性と家族満足度と理想の家族との関連**

|       | 凝集性   | 家族満足度 | 理想の家族 |
|-------|-------|-------|-------|
| 凝集性   | —     |       |       |
| 家族満足度 | .50** | —     |       |
| 理想の家族 | .44** | .62** | —     |

\*\* $p < .01$

## 第6章 考察

### 第1節 対象者の特性

核家族化は、子どもと家族に大きな影響を与え、否応なくその人生にも変化を迫っている。そして、社会問題とともに家族機能も変化を余儀なくされていると考えられる。中学生の時代は、個人のライフサイクルからみたとき、思春期は著しい身体的発達や第二次性徴に伴い、不安定になりやすい時期であると言われている。<sup>40)</sup> 家族のライフサイクルの視点からも、思春期の子どもがいる時期は、思春期の子どもの発達の危機だけでなく、その親の中年期の危機などさまざまな変化を伴う時期である。この様な不安定になりやすい中学生の時代に家族の心の支え、家族の存在が非常に大切になってくると考える。

厚生労働省が調査した平成 21 年度国民生活基礎調査<sup>21)</sup>の「世帯構造別にみた児童のいる世帯数」によると、全国の児童（18 歳未満の未婚の者）のいる世帯に占める核家族世帯の割合は 76.0%、3 世帯家族の割合は 19.8%であった。児童のいる世帯の平均児童数は、1.72 人であった。また、本研究の対象 A 中学校の地域特性は、千葉ニュータウン造成計画により住宅地として開発された地区が中心となっていて、住民の大部分は船橋、東京方面へ通勤するサラリーマン家庭で占められている。そして、周辺部は農村部でもあり、梨畑などが点在するなど自然環境にも恵まれている。本研究の対象者の家族形態と比べると、核家族が若干多い集団であることが示唆された。三世帯家族が少ないのは、アパートやマンション住まいの家族が若干多いためだと考える。きょうだい数では、4 人が 1 名 (15.4%)、3 人が 17 名 (10.1%)、2 人が 79 名 (46.7%)、1 人が 46 名 (27.2%)、0 人が 26 名 (15.4%)であった。3 人兄弟が一番多く次に 2 人兄弟が多い結果は、全国でみると 1 世帯辺りの兄弟数が多いことが示唆された。ニュータウンであることから子どもがいる家族が多いと考えられる。

### 第2節 家族機能

#### (1) 凝集性

凝集性の平均値と SD は、男性  $33.17 \pm 7.99$ 、女性  $34.32 \pm 8.67$  であった。男女の比較では、有意な差はみられなかった。思春期の子どもたちの間で家族への意識や存在にあまり差はないと考える。

草田ら<sup>16)</sup>の先行研究での凝集性の平均値と SD は、対象者  $31.99 \pm 7.00$  であった。草田ら<sup>16)</sup>の研究は、対象者が 491 名の男女（専門学生、大学生）あるため本研究の対象者であ

る中学生とは異なり、単純に結果の比較は難しいと考える。本研究の結果は、草田らの結果よりも高い数値になった。その理由として、年齢は違うが同じ学生として考えると専門学生や大学生よりも中学生は子どもであり、まだ家族や親から独立できていないことが考えられる。

## (2) 凝集性と兄弟数の関連

凝集性尺度の各質問項目と兄弟数との関連では、4項目「家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている」と兄弟数に5%水準で有意な差がみられた。このことより、兄弟が少ないほど家族機能の凝集性が高いことがわかる。平井<sup>4)</sup>の先行研究では、1人っ子群は「家族凝集性」、「受容的コミュニケーション」などの家庭内の要因である因子で2人以上の兄弟群よりも有意な差がみられたと示唆されており、本研究の結果は、先行研究を支持する結果となった。先行研究と結果から、兄弟数が少ない程、一人一人が家族とのコミュニケーションをとることができ、家族への依存傾向が高いと示唆された。

## (3) 家族タイプ別の比較

凝集性は低い方から、「遊離 (disengaged)」-「分離 (separated)」-「結合 (connected)」-「膠着 (enmeshed)」の4段階に分けられる。その結果、遊離 18 人(10.7%)、分離 45 人(26.6%)、結合 56 人(33.1%)、膠着 50 人(29.6%)であった。「結合」がもっとも高く続いて「分離」が高く、「遊離」がもっとも低い結果になった。「結合」と「分離」は、凝集性が中間レベルにあり、家族機能が最もよく働くとされている。この結果から、現代家族の問題点として、家族機能の希薄化が進んでいると言われている中でも本研究の対象者は、家族内が情緒的なつながりが強く、比較的家族機能が働いていると考えられる。しかし、先行研究の草田ら<sup>16)</sup>による、凝集性尺度のリニアな関係はみられなかった。

本研究の結果は、中間レベルがもっとも多い結果になったが、「膠着」に近い「結合」の値が一番多く「膠着」の値も高いことから、凝集性が高い家族と示唆された。その原因として考えられることは、日本人とアメリカ人のそもそもの「家族」の考え方の違いからではないだろうか。日本人の家族の特徴として、「まず家族があつて個人が存在する」という家族重視の考え方がある。そして、アメリカ人の家族の特徴として、「まず個人があつてその集団が家族だ」という考え方がある。この違いからも分かるように、日本人はアメリカ人よりも凝集性が元々高いことが考えられる。よって、本研究での凝集性が高い結果は必



然的な結果であり、むしろ日本人の家族の特徴を表した結果がみられたと考えられる。また、もう一つ考えられる理由として現代の家族を念頭に考えてみる。青年期の発達段階の特徴であるコール<sup>40)</sup>の「家族からの解放」、ハヴィガースト<sup>40)</sup>の「両親やほかの大人から情緒的に独立すること」などがあげられ、発達段階の中学生は家族から情緒的に独立する傾向にあるとわかる。しかし、本研究での結果は、その反対傾向にあると示唆された。近年では成人しても独立していかない子どもや、いつまでも自立した成人として子どもを見ることができない親などの問題が存在することが言われている。年齢は違うが先行研究での問題が表れている結果と考えられる。本来、中学生は親からの自立をし始める時期であるが、学童期の特徴である親への「甘え」や「依存」が中学生に移行したからといってすぐなくなるわけではない。そのため、親が子どもの独立のために適切な対応や教育が必要だと考えられる。つまり、親子の適度な位置関係であることが望ましいと考える。しかし、メディアなどでたびたび「友達親子」「モンスターペアレンツ」「過保護」などが聞かれる。これは、いずれも親子の凝集性が高すぎることを表していると考えられ、親の対応や教育が適切ではないことが考えられる。親子関係の観点から現在の家庭をみると小規模化、核家族化により家庭内の人間関係が単純化し特に兄弟数の減少は、親と子が直接結びつく形を進行させており、加えて外での人間関係は人格的結合が希薄になっているので、どれを補う形で親と子が情緒的に融けあおうとする気持ちが強いため、親子関係が予想以上に密接になっていると言われている。<sup>11)</sup>また、近年では親子関係に関して親への犯行よりもむしろ親との情緒的結びつきの強化が指摘されているとも述べられている。<sup>48)</sup>

本研究では、家族全体に調査をしていないため一概には言えないが現代の日本人家族の特徴として、家族全体の凝集性が高く、親も子も独立することが難しい傾向にあるのではないだろうか。

## 第2節 家族満足度

家族満足度では、学年差、男性 4.16±1.04、女性 4.03±1.13、共に有意な差はみられなかった。対象者全体の家族満足度比では、「満足している」78人(46.2%)、「まあまあ満足している」(29.6%)、「どちらともいえない」27人(16%)、「やや不満」6人(3.6%)、「不満」(4.7%)であった。全体の7割が満足している傾向であった。

村木ら<sup>24)</sup>の先行研究では、家族関係のタイプごとの家族関係満足感については、極端群

は、バランス群、中間群よりも有意に家族関係満足感得点が低かった。従って、「きずな」(凝集性)と「かじとり」(適応性)が極端に偏っていると認知する中学生は家族関係の満足感が低いものの、どちらか一方の次元でバランスが取れていれば、家族関係に満足できるということが明らかにされている。本研究の対象者の凝集性は、中間レベルにあり対象者の7割が家族に満足している結果であった。そのため、先行研究を支持する結果となった。また、父母どちらかと肯定的な絆の影響を感じてさえいれば家族全体に対する協力者自身の満足度が相対的に高くなると言われている。<sup>45)</sup>

千葉は、家族への満足を形成する要因として親とのコミュニケーションの良好さを示唆している。現代の親は子どもの希望を先取りする形で変化しており、家族満足を感じる傾向を強めていると示している。<sup>3)</sup>

本研究では中学生のみに調査を行っているため、家族成員との関わりからの調査も必要だ。

### 第3節 家族機能との関連

家族機能尺度と家族満足度と理想の家族との関連では、家族機能尺度と家族満足度間、家族満足度と理想の家族間、家族機能と理想の家族間のそれぞれに( $P < .01$ )に有意な正の相関がみられた。特に家族機能と家族満足度、家族満足度と理想の家族において比較的高い相関がみられた。

この結果から、凝集性が高い程家族に満足していることが示唆された。茂木<sup>22)</sup>は、先行研究で家族は現実の自分の家族において、うまく機能し充足されていると評価する側面ほど、健康な家族機能としての重要度も高く評価していることを示唆している。つまり、健康な家族機能の重要度と現実の家族機能の充足度との関係が強いと考えられる。本研究の結果は、先行研究の結果を支持するものと仮定すると、凝集性が高い家族は、家族がうまく機能しているという結果となる。

家族機能尺度と家族満足度と理想の家族のそれぞれに相関がみられた結果から、本研究の目的である理想の家族像が凝集性の高い家族を理想としており、健康な家族と認知しているとは、一概に言えないと考える。しかし、凝集性が高い家族だけが家族に満足していることは示唆された。これは、円環モデルの仮説<sup>16)</sup>とは異なった結果となった。

#### 第4節 理想の家族

理想の家族では、学年差、男性(3.55±1.11)、女性(3.36±1.16)、共に有意な差はみられなかった。対象者全体の理想の家族では、「大変似ている」32人(18.9%)、「まあまあ似ている」57人(33.7%)、「どちらかといえば似ている」43人(25.4%)、「あまり似ていない」28人(16.6%)、「全く似ていない」9人(5.3%)であった。全体の6割程度は、似ていると答える傾向であった。また、アンケート用紙の質問項目の中に、「想像したあなたの理想の家族とはどのような家族ですか。」の問いを自由記述で答えさせた問いがある。その結果を6つのグループ、①「仲の良い家族」104人(61.5%) キーワード(仲の良い、暖かい、笑顔、平和、協力、会話)②「マイナス面のない家族」43人(25.4%) キーワード(喧嘩、お金、差別、門限、うるさい)③「特になし」7人(4.1%)④「普通の家族」6人(3.6%)⑤「自由な家族」5人(3%)⑥「自分の家族」4人(2.4%)に分類した。その結果、仲の良い家族が理想だと答えた人が全体の6割であった。

茂木<sup>22)</sup>の先行研究では、家族イメージ法においても、青年の理想の家族像では、構造的バランスのとれたものが多いことが報告されているが、現実と理想との比較で、どのような現実の家族パターンでも、同じような理想の関係を望むことが示唆されている。茂木<sup>(31)</sup>は、先行研究で「凝集性」は家族の現状を維持するために重要な機能として認められやすく、家族のもつ家族像にも反映していることを明らかにしている。

本研究での家族像については、凝集性のみの調査であったため、家族像に関係のある適応性の結果は得られていない。しかし、本研究で得られた対象者の家族の特徴から家族像を考えてみると、①凝集性が高い家族②家族に満足している人が7割③自由記述より「仲の良い家族」を理想としている人6割などから、凝集性が高い家族つまり、仲の良い家族を理想の家族としている傾向にある可能性が考えられる。

#### 第5節 今後の課題

本研究においては多くの課題が残されている。まず、本研究は凝集性尺度のみでの調査であったが、リニアな関係は認められなかった。凝集性だけでの調査は可能ではなかったのではないだろうか。そのため、凝集性・適応性の両方からの調査が必要であると考えられる。次に、家族機能測定尺度 FACESⅢについてだが、日本の家族機能を測る尺度として、適切であるかという点だ。先述した通り、近代家族は家族の多様化に伴い近代家族のモデルは存在しないとされている。その様な新しい時代の家族形態、日本の文化などを主観的な側

面も入れた新たな尺度の作成が必要だと考える。また、現代プライバシーの問題が重要視されているため、家族にふみこんだ質問をすることは非常に困難であるため、家族成員全体に調査ができないのが現状だ。そのため、家族成員個人に調査をしても、家族機能を測れる尺度を作成することも必要だと考える。

家族像については、中学生の年代に「理想の家族とはなにか」という問いが少し難しかったという印象がある。そのため、インタビュー形式で家族について調査するなどの家族機能を測る尺度の中で家族像を測れる尺度を入れることが必要だと考える。

## 結論

(1) 凝集性は低い方から、「遊離(disengaged)」-「分離(separated)」-「結合(connected)」-「膠着(enmeshed)」の4段階に分けられる。その結果、遊離 18 人(10.7%)、分離 45 人(26.6%)、結合 56 人(33.1%)、膠着 50 人(29.6%)であった。「結合」がもっとも高く続いて「分離」が高く、「遊離」がもっとも低い結果になった。「結合」と「分離」は、凝集性が中間レベルにあり、家族機能が最もよく働くとされている。この結果から本研究の対象者の家族は、比較的家族機能が働いていると考えられる。

(2) アンケート用紙の質問項目の中に、「想像したあなたの理想の家族とはどのような家族ですか。」の問いを自由記述で答えさせた問いがある。その結果を6つのグループ、①「仲の良い家族」104人(61.5%) ②「マイナス面のない家族」43人(25.4%)③「特になし」7人4.1%④「普通の家族」6人(3.6%)⑤「自由な家族」5人(3%) ⑥「自分の家族」4人(2.4%)に分類した。その結果、仲の良い家族が理想だと答えた人が全体の6割であった。

(3) 凝集性と家族満足度と理想の家族との関連では、家族機能尺度と家族満足度間、家族満足度と理想の家族間、家族機能と理想の家族間のそれぞれに( $P < .01$ )に有意な正の相関がみられた。特に家族機能と家族満足度、家族満足度と理想の家族において比較的高い相関がみられた。

以上の諸点により、現代の中学生の理想の家族は、凝集性が高い家族つまり、仲の良い家族を理想の家族としている傾向にある可能性が示された。

## 要約

家族とは、これまで森岡<sup>19)</sup>によって「夫婦・親子・きょうだいなど、少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い関わり合いで結ばれた、幸福〔well-being〕追求の集団である」と言われ、このような考え方はごく普通に受け入れられてきた。しかし、日本の家族形態は核家族や単身世帯が増え、少子・高齢化が進行している。20世紀後半、家族の個人化が急速に進み、家族の多様化をもたらしたと言われ、現代家族は、近代家族のような主流となるモデルは存在しないと言われている。<sup>5)</sup>

核家族化や少子高齢化などの社会の変化は、子どもと家族に大きな影響を与え、否応なくその人生にも変化を迫っている。そして、社会問題とともに家族機能も変化を余儀なくされていると考えられる。中学生の時代は、個人のライフサイクルからみたとき、思春期は著しい身体的発達や第二次性徴に伴い、不安定になりやすい時期であると言われている。<sup>40)</sup>この様な不安定になりやすい中学生の時代に家族の心の支えとして家族の存在が非常に大切になってくると考える。

そこで、本研究では、中学生からみた家族の家族機能と家族満足度の関連について、家族満足度と家族機能測定尺度を用いて分析し、現代の理想の家族像を明らかにすることを目的とする。対象者は、千葉県のア中学校(成田市近郊)に通う中学生 183名。調査方法は、無記名自記式質問紙法を用いて調査を行った。

凝集性を4タイプに分けた結果、遊離 18人(10.7%),分離 45人(26.6%),結合 56人(33.1%),膠着 50人(29.6%)となった。結合家族が一番高いことから比較的家族機能が働いていることが考えられる。家族満足度得点においては、膠着家族の値が一番高い結果となった。家族機能尺度と家族満足度と理想の家族との関連は、それぞれに( $P < .01$ )に有意な正の相関がみられ、凝集性が高い程家族に満足していることが示唆された。自由記述で得られた理想の家族像については、仲の良い家族(61.5%),マイナス面のない家族(25.4%),とくになし(4.1%),普通の家族(3.6%),自由な家族(3.0%),自分の家族(2.4%)となり、全体の半分以上が仲の良い家族を理想としていることがあきらかになった。本研究の結果は、日本の家族の特徴を表していると考えられる。中学生の発達課題の特徴の一つに「情緒的に家族から独立すること」がある。本研究では、家族全体に調査をしていないため一概には言えないが現代の日本人の特徴として、家族全体の凝集性が高く、親も子も独立することが難しい傾向にあるのではないだろうか。

現代の中学生の理想の家族は、凝集性が高い家族つまり、仲の良い家族を理想の家族としている傾向にある可能性が示めされた。

# The Relationship between Family Structure and Family Satisfaction in the View of a Junior High School Student

Hana Kamiya

## Summary

Recently in Japan, family structure has been changing and there has been an increase in nuclear families and single-person households. Meanwhile, problems such as birthrate decline, population aging, and shrinkage of the working population continue unabated. It is said that the function of family is starting to wear thin. It is important to understand these changes accurately in such a modern world.

The purpose of this study is to analyze the degree of family satisfaction and family structure in the view of a junior high school student by using the Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III, and also to clarify the ideal family picture of junior high school students.

The questionnaire investigation was conducted on 183 students of A junior high school in Chiba Prefecture. The relationship between family structure and family satisfaction was analyzed using the correlation coefficient. Microsoft Excel 2010 and SPSS version 16 were used to analyze the data.

Family structure was divided into four categories: very connected, connected, separated, and disengaged. The results for each category are as follows: very connected 50 people (29.6%), connected 56 people (33.1%), separated 45 people (26.6%), and disengaged 18 people (10.7%). Results with high value show a strong union, whereas results with low value show separation in the family. There was a positive correlation between family structure and family satisfaction, both with  $p$ -values  $< 0.01$ . High connectivity within the family showed a high degree of family satisfaction.

The results of the questionnaire concerning the ideal family picture were as follows:



families that get along well (61.5%), no negative images (25.4%), insignificant (4.1%), normal families (3.6%), families that have more freedom (3.0%), my family (4.1%). More than half of the subjects idealized families that get along well. The opinion of junior high school students for the ideal family structure was identical to the real family like the highest function and self-esteem of the family.

The results are reflective of modern day junior high school students. One of the questions concerning junior high school students is the trend for them to passionately gain freedom and independence from the family. However, the research here showed that junior high school students actually preferred high connectivity with their families, and it is becoming harder for children to gain independence from their parents.

The ideal family picture for modern day junior high school students is high connectivity within the family, in other words, they tend to idealize families that get along well.

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、島内憲夫先生には、お忙しい中の確なアドバイスをいただくとともに、研究期間を通していつも温かく見守っていただきました。2年間、いつもぎりぎりでも迷惑ばかりかけてしまいましたが、最後まで心配して応援してくださいました。心より感謝申し上げます。そして、主査である広沢正孝先生、副査の渡邊貴裕先生にもご指導頂き心より感謝申し上げます。また、初めての統計処理の時に助けて下さった広津信義先生、研究内容について悩んでいた時、助けて下さった鈴木美奈子先生、この研究がたくさんの方々の協力のもと完成に至ったこと心より感謝申し上げます。

そして、最後になりましたが、研究の趣旨をご理解下さり、快く調査に協力して下さったA中学校の中嶋敏校長先生を始め、先生方、生徒の皆様方に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) Antonovsky, A. & Sourani, T. (1988). :Family Sense of Coherence and Family aptation. *Journal of Marriage and the Family*. 50, 79-92.
- 2) ブルーム、セルズニック & ブルーム (2005). *社会学*, 東京, ハーベスト社.
- 3) 千葉聡子 (2000). 対立する家族の二つの機能—データが示す家族機能の変化—
- 4) 平井誠子 (2001). 家族の凝集性と家族コミュニケーション—子どもの社会的スキルに対する影響.
- 5) 平野かよ子 (2008) . *ナーシング・グラフィカ* ⑦ 健康支援と社会保障—健康と社会・生活—. 第2版, 大阪府, メディカ出版, 50-54.
- 6) 戈木クレイグヒル滋子ら (1995). 日本語版 Feetham 家族機能検査の検討. *小児保健研究*. 54:616-620.
- 7) 法橋直宏 (2000). FFFS (Feetham 家族機能調査) 日本語版 I の開発とその有効性の検討 *家族看護学研究*. 6;2-10.
- 8) 板倉憲政ら (2012). 青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究. *対人社会心理学研究* -(12) , 85-91.
- 9) 神崎ら (2012). FFS (家族機能尺度) 日本語版の開発—養育期の家族を対象とした信頼性と妥当性の検討—. *日本看護科学会誌*, Vol132, No. 1, pp. 50-58.
- 10) 片山理恵 (2012). 乳幼児をもつ母親、父親の家族機能と子育て支援. *日本女性心身医学学会雑誌*. Vol. 15. No. 3, pp. 294-304.
- 11) 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造 誠心書房
- 12) 北島歩美 (1993). 思春期の子どもの変化に伴う家族の変化
- 13) 小西史子 (2000). 親子のコミュニケーションが中学生の「心の健康度」に及ぼす影響. *日本家政学会誌*. Vol. 51. No. 4, 273-286.
- 14) 杭瀬智子 (2003). 日本における家族特性評価尺度の作成. *大阪大学人間科学部人間学科. 臨床死生学年報* 8, 30-49.
- 15) 草田寿子 (1993), 各論 VI 対人関係検査によるアセスメント.
- 16) 草田寿子 (1995). 日本語版 FACES III の信頼性と妥当性の検討. *カウンセリング研究*. Vol. 28. No2.
- 17) 黒川衣代 (1998) . 食事シーンから見た家族満足度—中学生を対象として—. 信愛

紀要, 38, 1-8.

- 18) 目黒依子 (1987). 個人化する家族. 1 版, 東京, 勁草書房.
- 19) 盛岡清美ら (1997). 新しい家族社会学. 四訂版. 培風館.
- 20) 森山美智子 (2001). ファミリーナースィングプラクティス. 東京. 医学書院.
- 21) 文部科学省 (2000). 生徒指導上の諸問題の現状について.
- 22) 茂木千秋 (2003). 家族図式による現実と理想の家族関係の比較—家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から—. 仙台白百合女子大学紀要, 7, 29-43.
- 23) 茂木千明 (2007). 健康な家族機能に対する家族の評価. 仙台白百合女子大学紀要, 11, 65-80.
- 24) 村木美香・高橋道子 (2010). 中学生の友人関係、家族関係と精神的健康度の関連. 東京学芸大学紀要, 61, 195-204.
- 25) 中村由美子 (2003). 子どもをもつ家族への FAMILY Dynamics Measure II (FDM II) 日本語版の検討. 青森保健大雑誌. 5(1), 69-74.
- 26) 中村由美子 (2003). 養育期にある家族の家族機能モデルの構築. 日本小児看護学会誌. Vol. 12, No. 2. p. 45-52.
- 27) 中村由美子 (2006). A 町の中学校の子どもをもつ家族の家族機能の特徴. 青森保健大雑誌 7(1), 45-52.
- 28) 中村由美子 (2006). A 町の養育期にある家族と中学生の子どもをもつ家族の家族機能の比較. 青森県立保健大学雑誌 7(2), 203-212.
- 29) 長津美代子 (1996). 家族の多様化と個別化, 日本家政学誌. Vol. 47, No8. 769-775.
- 30) 長津美代子 (1999). 中学生がいる家族の個別化と凝集性～先行研究と「情報機器の個別所有に関する調査」から～. 群馬大学教育学部紀要, 第 35 卷, 247-270.
- 31) 長津美代子 (2001). 家族の個別化・凝集性と中学生の自尊感情. 日本家政学会誌. Vol. 52. No. 11 1069-1082.
- 32) 野口ら (1991). FES (家族環境尺度) 日本語版の開発: その信頼性と妥当性の検討. 家族療法研究. 第 8 巻第 2 号, 456-463.
- 33) 岡道哲雄 (1985). あたたかい家族. 講談社
- 34) Olson. D. H (1990 ). Family Circumplex Model: Theory, Assessment and Intervention” Journal of Family Psychology Special Issue, 4, pp. 55-64.
- 35) 佐藤悦子 (1986). 家族内コミュニケーション. 勁草書房

- 36) 関戸好子(2005). 日本語版家族力学尺度Ⅱ(FDMⅡ)の開発. 山形保健医療研究. 8:33-40.
- 37) 佐伯俊成ら(1997). Family Assessment Device (FAD)日本語版の信頼性と妥当性. 精神科診断学, 8(2), 181-192.
- 38) 鈴木和子ら(1999). 家族看護学—理論と実践. 東京. 日本看護協会.
- 39) 鈴木久美子(2000). 家族凝集性からみた家族アセスメント尺度: 展望. 筑波大学心理学研究, 第22号, 227-234.
- 40) 多田俊文(1988). 発達達題と教育2. 開隆堂.
- 41) 立木茂雄(1999). 家族システムの倫理的・実証的検証—オルソンの円環モデル受当性の検討—. 東京, 川島書店.
- 42) 立山慶一(2006). 家族機能測定尺度(FACESⅢ)邦訳版の信頼性・受当性に関する一研究.
- 43) 種吉啓子(2006). 摂食障害のある子どもの家族の家族機能に関する文献検討. 日本小児看護学会誌. Vol. 15, No. 2, p. 105-111.
- 44) 谷井淳一(2006). 青年期の適応と親子関係に関する研究—親役割診断尺度の開発とその活用—
- 45) 戸口愛恭泰(2008). 中学生における両親との絆認知と家族満足度との関連性. 日本教育心理学会総会発表論文集(50), 658.
- 46) 辻岡美延(1978). 親子関係の類型. 教育心理学研究. 第26巻, 第2号.
- 47) 若島孔文(2009). 家族の病とストレス. 日本家族心理学会(編)家族心理学報27 家族ストレス金子書房 pp130-140
- 48) 山田順子(1988). 青年期の母子関係心理学評論, 31, 88-100.

## 中学生からみた家族の家族機能と家族満足度に関する研究

順天堂大学スポーツ健康科学研究科博士前期課程  
健康社会学研究室 神谷 葉南  
指導教員 教授 島内憲夫

本研究では、「家族との関わりあいや家族との生活についての関連」を明らかにすることを目的としています。ただし、このアンケートのデータは修士論文作成のみに使用します。また統計的な処理をしますので、個人が特定されることは一切ありませんので、安心してお答えください。  
以上のことをご理解の上、ご協力をお願い致します。

①性別【男性・女性】 ②学年（ ）年生

③おじいさん、おばあさんは一緒に住んでいますか？ はい・いいえ

④兄弟姉妹は、全部で何人ですか？（ ）人

⑤次の質問では、あなたがご自分の家族についてどのような考えをお持ちなのかをおたずねします。自分の家族に当てはまるものには、「はい」に○を当てはまらないものには「いいえ」に○をつけて下さい。

|   |    |     |
|---|----|-----|
| 1 家族の間で用事の時は、かかわる。                            | はい | いいえ |
| 2 家の決まりは皆が守るようにしている                           | はい | いいえ |
| 3 休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある。              | はい | いいえ |
| 4 悩みを家族に相談することがある。                            | はい | いいえ |
| 5 わが家では家族で何か決めても、守られたことがない。                   | はい | いいえ |
| 6 我が家では、みんなで約束したことで守れないことが多い。                 | はい | いいえ |
| 7 休みの日などは家族で一緒に過ごせないことが多い。                    | はい | いいえ |
| 8 家族同士お互いにスキンシップがある方だ。                        | はい | いいえ |
| 9 誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている。            | はい | いいえ |
| 10 落ち込んでいるときは、お父さんお母さんは心配をしてくれるが、そっとしておいてくれる。 | はい | いいえ |
| 11 困ったことが起き話し合いをしたとき、最終的な結論は、いつも決まった人の意見が通る。  | はい | いいえ |
| 12 困ったことが起きたときに、家族の話し合いをしないで勝手に行動をしてしまう人がいる。  | はい | いいえ |
| 13 家族内でお手伝いなどの役割分担がスムーズにいかないときにみんなで協力し合う。     | はい | いいえ |
| 14 最近、家族内では、必要最低限の会話はあるが、それ以上の会話は少ない。         | はい | いいえ |
| 15 お手伝いなど家で決められた仕事分担がうまくできない場合、他の人に気軽に頼める。    | はい | いいえ |
| 16 困ったことがあって家族で話し合いをしたときに、決まったことは守るようにしている。   | はい | いいえ |

⑥次の項目は、家族の生活に関する質問です。それぞれの質問に「大変満足している」から「ぜんぜん満足していない」の5段階になっています。あてはまるものに一つだけ○をつけて下さい。

5:満足している 4:まあまあ満足している 3:どちらともいえない 2:やや不満 1:不満

あなたは、家族生活に満足していますか？

5 4 3 2 1

⑦次の質問は、「大変似ている」から「全く似ていない」までの5段階になっています。あてはまるものに一つだけ○をつけてください。

5:大変似ている 4:まあまあ似ている 3:どちらかといえば似ている 2:あまり似ていない 1:全く似ていない

あなたがこれこそ最高、理想だという家族を思い浮かべてみてください。あなたの家族はその理想の家族と比べて、似ているか、似ていないか、考えて、当てはまる番号に○をつけてください。

5 4 3 2 1

⑧ ⑦で想像したあなたの理想の家族とはどのような家族ですか。(ご自由にお書き下さい。)

( )

⑨以下の質問では、あなたがご自分の家族についてどのような考えをお持ちなのかをおたずねします。それぞれの質問に「いつもある」から「まったくない」の5段階になっています。あてはまるものに一つだけ○をつけて下さい。

5:いつもある 4:よくある 3:ときどきある 2:たまにある 1:まったくない

|    |                             |   |   |   |   |   |
|----|-----------------------------|---|---|---|---|---|
| 1  | 私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。    | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2  | 家族は、それぞれの友人を気に入っている。        | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3  | 私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。     | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4  | 家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5  | 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6  | 私の家族は、お互いに密着している。           | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7  | 家族で何かをする時は、みんなでやる。          | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8  | 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9  | 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。  | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 | 家族がまとまっていることは、とても大切である。     | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |